

大洲市肱川沿いの畑地に遺る境木の多様性と歴史



農研機構 徳岡良則



2016.07.19

大洲市肱川沿いの畑地に遺る境木の多様性と歴史

要約

肱川沿いの宇津～柴集落にかけて分布する畑地境界上の境木について、使用される樹種、それらの方言、利用法や植えられた経緯について調査しました。

その結果、下流域でボケ、中流域でマサキ、上流域でオオタチヤナギの境木がそれぞれ多くなる傾向が見られました。

植物の方言や利用法の聞き取りからは、少し前まではボケがより多く使われていたこと、マサキと庚申信仰や青面金剛との関係、生垣・庭木・工芸作物、野生樹木の利用など、多様な樹種が異なる背景のもとで入替わりながら、今日の境木景観が形作られてきたことが分かりました。

肱川沿いの境木景観とそれを支える民俗は、上・中・下流の集落で異なります。それぞれを未来に遺していくことが望まれます。



さかいぎ【境木】とは？

境界のしるしとした木(広辞苑第六版)



青森、栃木、埼玉、千葉、神奈川、東京、愛媛、高知、沖縄
など各地に分布(例. 香月洋一郎「景観のなかの暮らし」)

農地境界に維持される草木の役割



ドイツのヨーロッパパブナの生垣

著作権者: Caronnaさん、ライセンス: CC by-sa 3.0、

<https://en.wikipedia.org/wiki/Hedge#/media/File:Rotbuchenhecke_in_der_Eifel.jpg>

境界の目安

作物の風除

生活資材の供給

花粉媒介・天敵温存

生物保護

農村の風景

新潟県のはざ木



著作権者: Nihongo1234さん、ライセンス: CC by-sa 4.0.
<<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%B2%E6%9C%A8#/media/File:Hazagi,Niigata-city,Niigata,Japan.jpg>>

茨城県央の境木



茨城県南の境木



2014/2/5 8:23

武蔵野の境木&生垣樹種の時代変遷

山本良三(1981)武蔵野の開発と耕地防風垣の発達.農耕の技術

1700年以前?: **ウツギ**は防風垣ではなく**境木として**植栽

1850~1925年頃: 茶生産が増加。防風垣も**ウツギ**から**チャノキ**へ

1925~1940年頃: 農村に花屋増加。**ツツジ**、**マサキ**、**イブキ**等の庭木類が防風垣に

1945年頃: 養蚕の衰退により桑畑は耕作地に転換するも、境界の**クワノキ**、生長の早い**サワラ**を防風垣に

1980年頃: **チャノキ**、**ツツジ類**、**ウツギ**、**マサキ**、**サワラ**、**イブキ**、**チョウセンマキ**、**クワ**等が防風垣に見られる

時代毎の産業や文化に合わせて樹種転換

武蔵野には江戸時代に防風生垣を植栽



埼玉県三芳町HP参照

三富(さんとめ)新田は
17世紀末に川越藩主に
よって開発

屋敷地、耕作地、平地林
を規則的に区画配置

ウツギを防風に植えてい
たが、お茶の商品作物
価値の高まりで畦畔茶
へ転換

所沢市中富の土地利用例

長塚節「土」の境木の描写



・・・櫛の木の間を田の端へおりて
境木の牛胡頰子(ウシグミ)の傍
を注意して見た。

P.49

・・・畑はからりと成って境木に植
えられてある卯木(ウツギ)のびっ
しりと附いた白い花が其処にも
此処にも目に立って・・・

P.121

少なくとも明治には茨城県で境木を植栽

長塚節生家@常総市



世界各地の境木

オーストラリア

家畜の避暑地や土壌保全

ケニヤ

薬や木材を確保する

タイ、ラオス

人や家畜の避暑地、建材、家具、民具、食料、
薬、肥料、燃料、染料、他

バングラディッシュ

工芸作物、時給利用する非木材林産物、土壌
の肥沃度の維持

滋賀県のはざ木

稲掛けの支柱、柿渋の採取

関東の境木

お茶の小規模生産、祭祀での民具利用

※詳しい文献リストは次を参照下さい:
Tokuoka et al. (2019)
J Ethnobiol Ethnomed 15:21

Tokuoka et al. *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine* (2019) 15:21
<https://doi.org/10.1186/s13002-019-0201-8>

Journal of Ethnobiology
and Ethnomedicine

RESEARCH

Open Access

Tracing chronological shifts in farmland demarcation trees in southwestern Japan: implications from species distribution patterns, folk nomenclature, and multiple usage

Yoshinori Tokuoka^{1*}, Fukuhiro Yamasaki², Kenichiro Kimura³, Kiyokazu Hashigoe⁴ and Mitsunori Oka⁵

Abstract

Background: Understanding the history of anthropogenic vegetation is often difficult due to the lack of tangible historical evidence. In this study, we examined chronological changes of farmland demarcation trees planted on alluvial plains along the Hijikawa River in southwestern Japan based on species distribution patterns, folk nomenclature, and multiple usage of the trees.

Methods: The species composition of demarcation trees was investigated at 47 sites in 13 villages. We performed hierarchical clustering using Bray-Curtis measures to detect groups of similar tree composition and permutational multivariate analysis of variance to test whether differences in species composition correspond to village units. To better understand the traditional knowledge of demarcation trees, we conducted interviews with 53 farmers, most of whom were over 60 years old.

Results: Clustering resulted in six tree composition groups. The group characterized by the most frequently planted species, *Chaenomeles speciosa*, dominated around lower reach villages. The group characterized by *Euonymus japonicus* dominated around middle reach villages, and that characterized by *Salix pierotii* was mainly located around upper reach villages. *Chaenomeles speciosa* was always identified with the standard Japanese name *boke* or similar names. *Euonymus japonicus* and several other species were also called *boke* by many farmers. Several elderly farmers stated that *C. speciosa* was pervasive in upper and middle reach villages in their youth, suggesting the prototypical use of *C. speciosa* in the study area. In addition, some minor species were likely to have been left after commercial crop production or subsistence use between the late nineteenth and mid-twentieth centuries, including *Morus* sp. and *Celtis sinensis* for sericulture, *Salix koraiensis* for fiber production, and *Gardenia jasminoides* for food coloration. The name *kōshin banya* recorded for *E. japonicus* suggests that the species' use originated from the folk faiths *Kōshin-shinkō* and/or *Shōmen-Kōngō*.

(Continued on next page)

* Correspondence: tokuoka@affrc.go.jp

¹Division of Bioenergy, Institute for Agro-Environmental Sciences, National

Agriculture and Food Research Organization, 3-1-3, Kannondai, Tsukuba, Ibaraki

305-8604, Japan

Full list of author information is available at the end of the article



© The Author(s) 2019 **Open Access** This article is distributed under the terms of the Creative Commons Attribution 4.0 International License (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>), which permits unrestricted use, distribution, and reproduction in any medium, provided you give appropriate credit to the original author(s) and the source, provide a link to the Creative Commons license, and indicate if changes were made. The Creative Commons Public Domain Dedication waiver (<http://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/>) applies to the data made available in this article, unless otherwise stated.

境木の利用例の報告はあるものの
歴史背景はわかっていないことが多い

大洲市肱川の氾濫への備え

治水のためにナゲ(石積)が作られ、川岸にタケや樹木を植えた畑の境界維持のために**境木**が植えられてきた



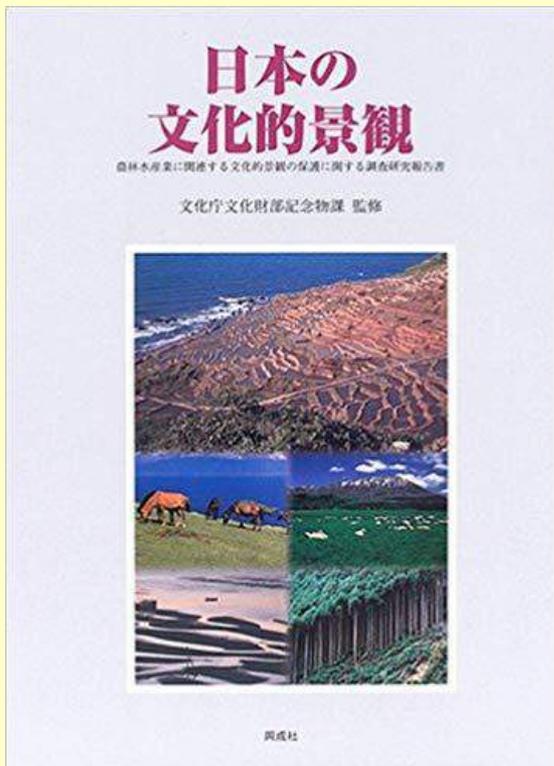
大洲市歴史的風致維持向上計画



大洲市
平成26年12月

文化的景観の重要地域にリストアップ（非認定）

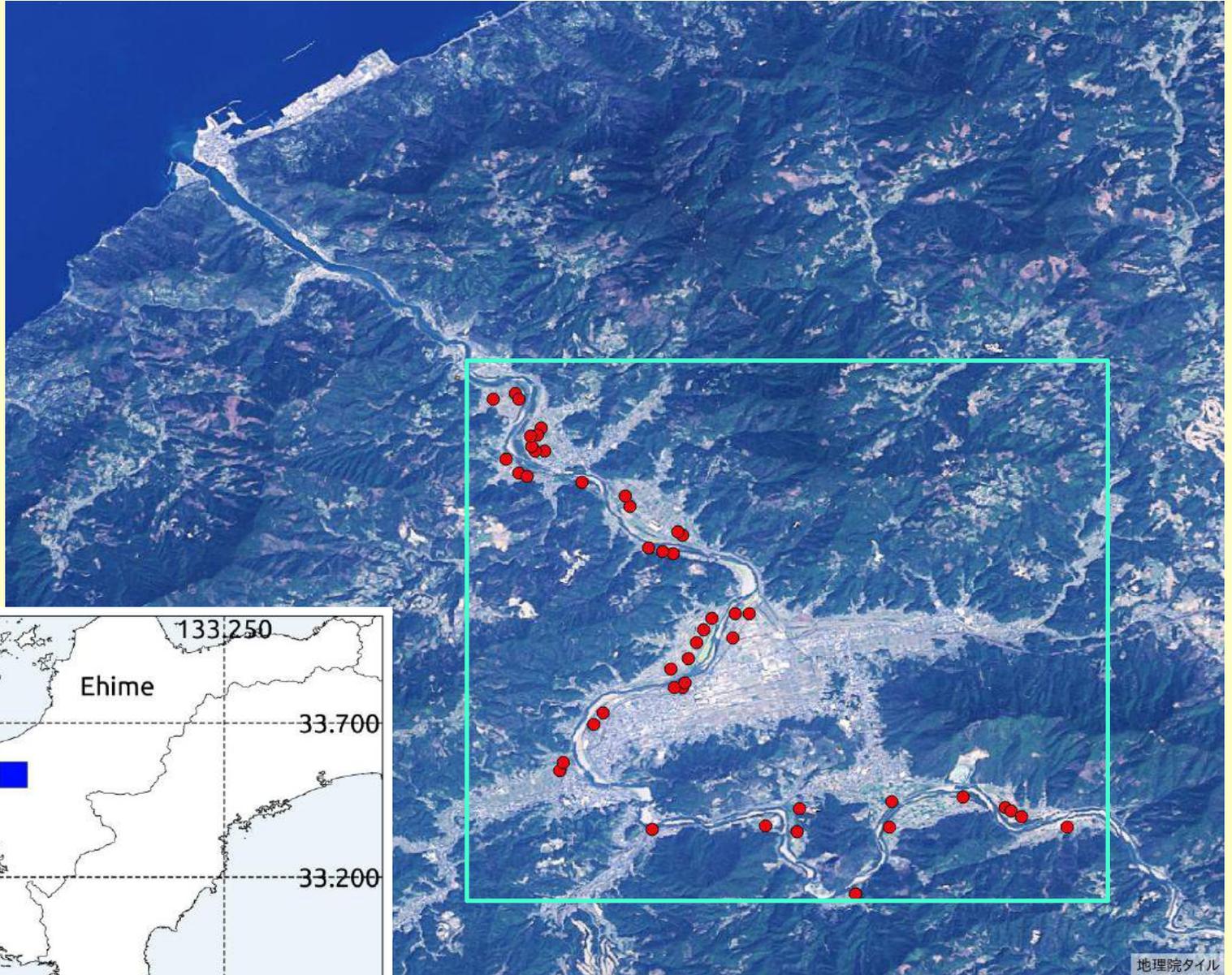
五郎・若宮の畑の境木



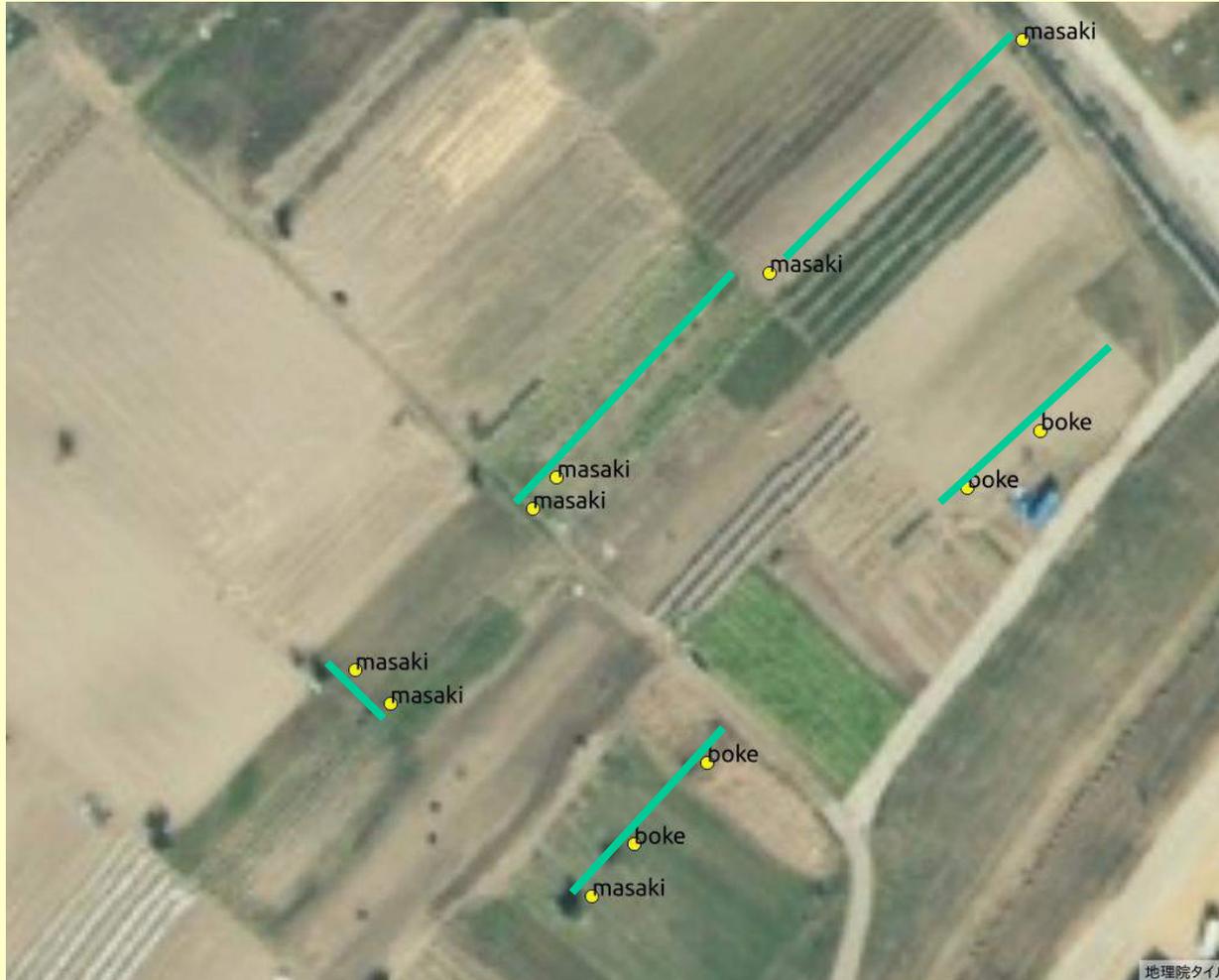
(文化庁(2005)より抜粋)
マサキ、ヤナギ、ボケ等の樹木が一定の間隔で植えられた畑地の景観は、洪水被害の多い地域において自然とともに生きた人々の知恵を物語る貴重な文化的景観である。

他集落に境木はないの？
各樹種はどんな歴史背景のもと植えられたの？

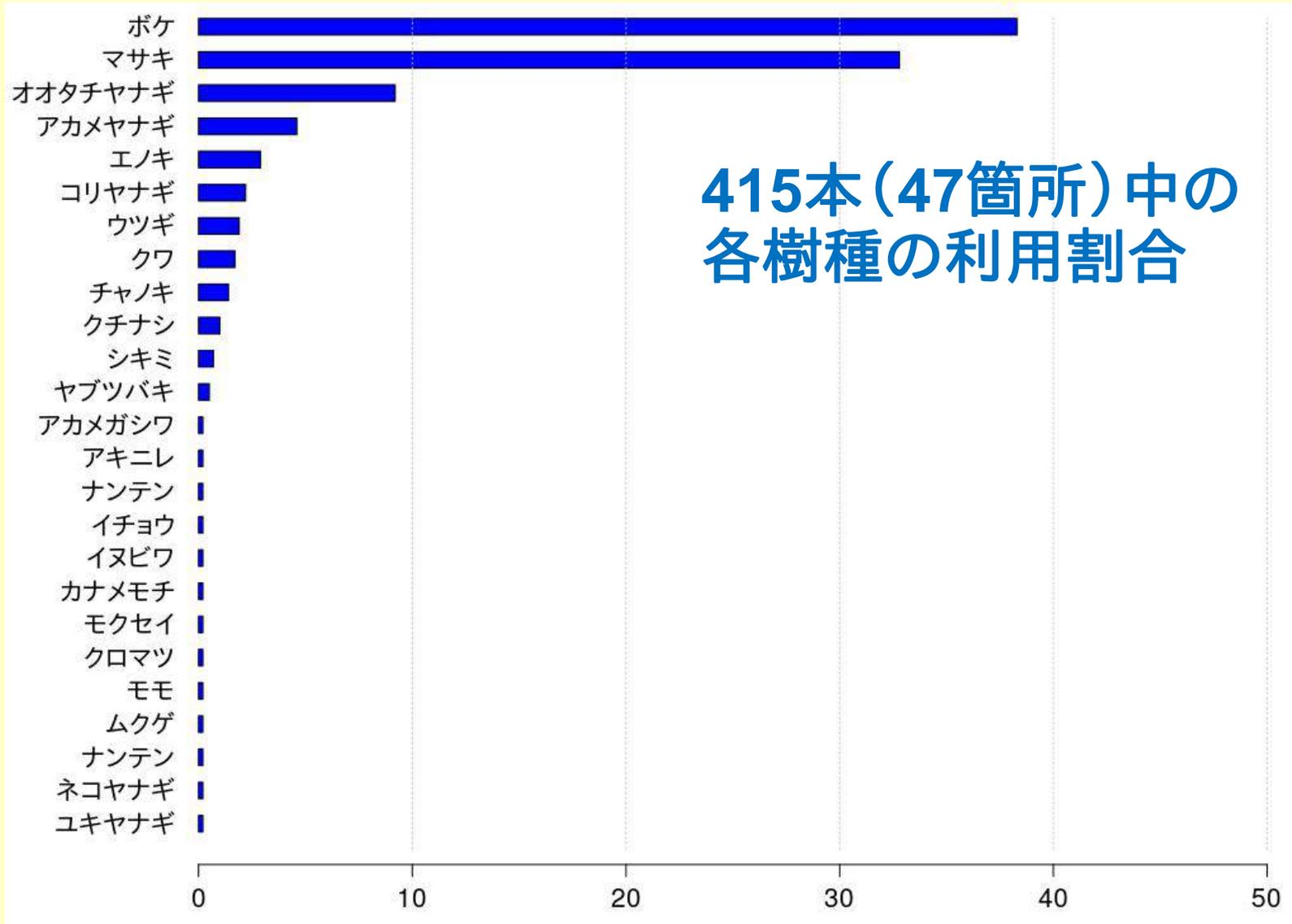
境木樹種の分布パターン、方言、利用法を調査



5つの畑地境界を無作為に選び樹種を記録、
農家さんに木の呼び名、利用法、植えた経緯を教えてもらう



大洲の境木樹種の多様性



ボケ、マサキが中心、ヤナギ類がこれに続く
常緑、落葉、在来、園芸植物など多様な樹種あり

本数 1 位 ボケ

(中国原産・落葉、方言名：ボケ24、イガボケ3、バラボケ1、ボケノキ1)



本数2位 マサキ

(在来・常緑、方言名：ボケ8、マサキ4、マユミ3、コウシンバナ1、
マメシバ1、アオキ1、不明or忘れた10)



本数3位 オオタチヤナギ

(在来・落葉、方言名：ヤナギ⁵)



本数4位 アカメヤナギ

(在来・落葉、方言名：ヤナギ¹、不明¹)



本数6位 コリヤナギ

(朝鮮半島原産・落葉、方言名：ヤナギ²)

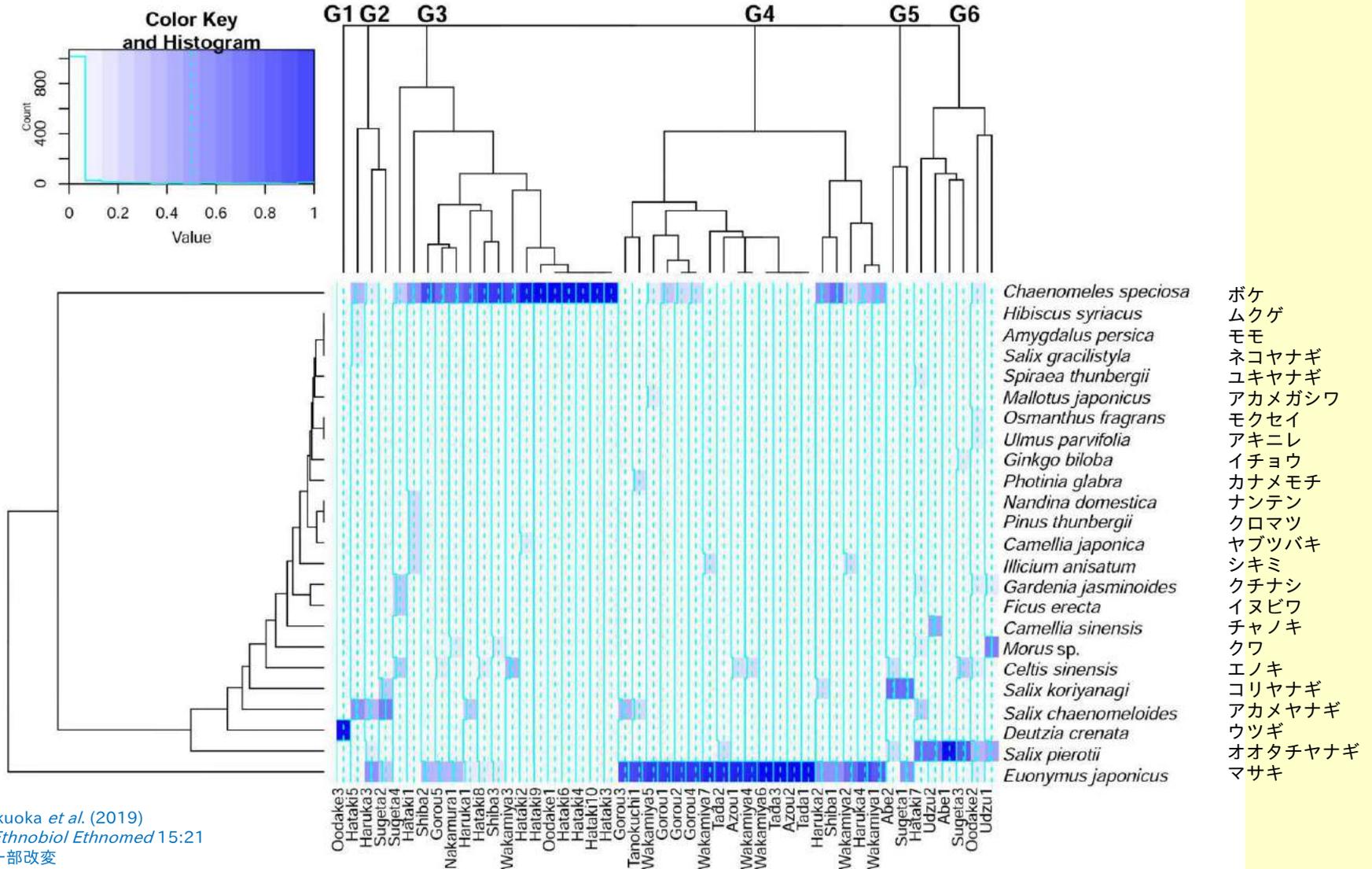


本数7位 ウツギ

(在来・落葉、方言名：ボケ¹、ウツギ¹、不明¹)



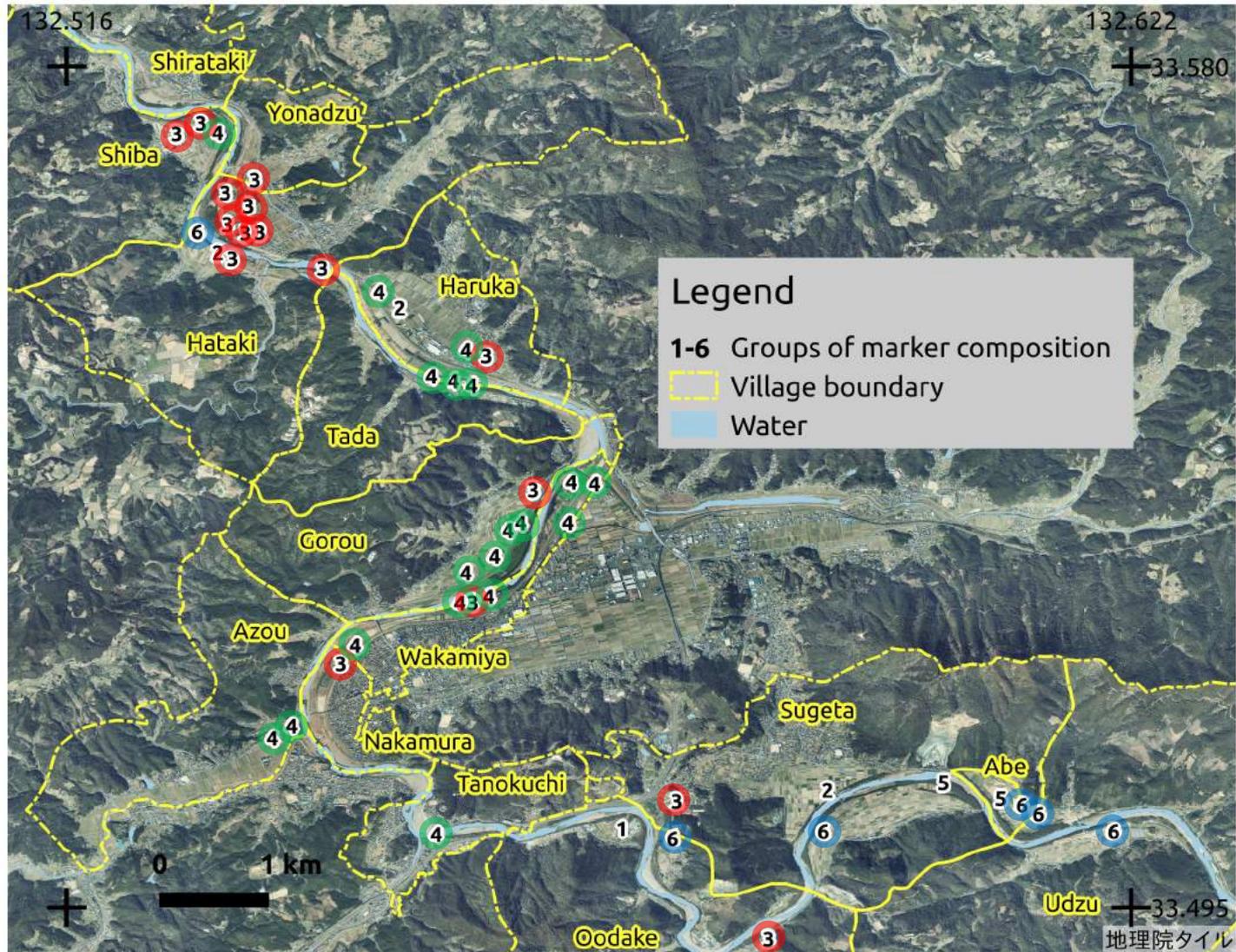
境木樹種の集落間の違い(クラスター分析)



Tokuoka et al. (2019)
J Ethnobiol Ethnomed 15:21
 を一部改変

ボケ、マサキ、オオタチヤナギ、アカメヤナギ、コリヤナギ、ウツギ
 を代表種とする6つの樹種の組み合わせグループ型が示された

集落間で異なる主要樹種



ボケ3は下流、マサキ4は中流、
オオタチヤナギ6は上流に多く見られた

植栽歴はほぼ不明、境界の目安としての役割が主

(53人対象の聞き取り)

境木はいつからあるの？

分からない(51人)

木しかないの？

石を目印にすることもある(5人)

管理方法は？

適宜剪定(37人) 秋・冬(3人) 所有者間で確認した時(2名)

境の目安以外の多目的利用方法は？

ない(39人) ボケやクチナシの花の鑑賞(3人)

ボケやマサキの生垣や庭木としての利用(3人)

クチナシの実で食品の着色(2名)

マサキを農作業の支柱に(1人) ヤナギの日陰で休む(1人)



クチナシの若い実

著作権者:Alpsdakeさん、ライセンス:CC by-sa 3.0、
<https://ja.wikipedia.org/wiki/クチナシ#/media/File:Gardenia_jasminoides_fruit.jpg>

現在の古老の証言

過去半世紀の境木の植え代え樹種

ヤナギ類(5人) マサキ(3人) ウツギ(1人) クチナシ(1人)

中流の若宮集落

ここ数十年でボケからマサキへと徐々に植え代えが進んできた
マサキは挿し木で活着しやすい

上流の宇津、阿部、菅田

昔はもっとボケが多かった

近現代の畑地作物の取り残しを境木に転用した

養蚕に要したクワ、エノキ(カイコの蛹化に使用?)
柳行李の材料としたコリヤナギ

生垣・庭木からの転用にも抵抗感はなさそう

ウツギ、ムクゲ、ツバキ、モモ、クチナシなど多様な樹種も利用
ボケ、マサキは生垣にも適する証言あり

境木の総称としてボケという植物名を使う傾向



本数 1 位 **ボケ**

方言名：

1. **ボケ** 24
2. イガ**ボケ** 3
3. バラ**ボケ** 1
4. **ボケ**ノキ 1



本数 2 位 **マサキ**

方言名：

1. **ボケ** 8
2. マサキ 4
3. マユミ 3
4. コウシンバナ 1
5. マメシバ 1
6. アオキ 1
7. 不明or忘れた 10

クチナシ、ウツギ、ムクゲ等も**ボケ**の方言で呼ぶ人がいた

樹種変遷の証言や総称的呼び名としてのボケの使用は、少し前の時代にボケがより多く植えられていたことを示唆

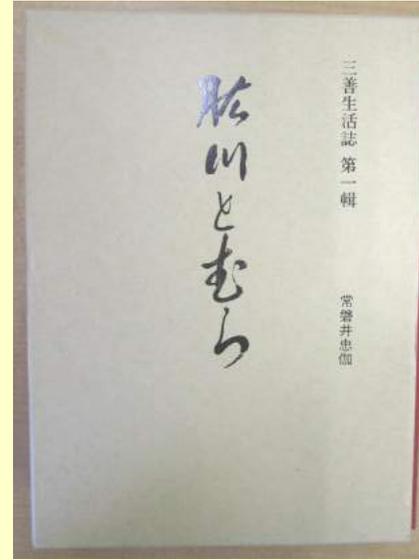
マサキと庚申信仰の関係



本数2位 マサキ

方言名:

1. ボケ8
2. マサキ4
3. マユミ3
4. コウシンバナ1
5. マメシバ1
6. アオキ1
7. 不明or忘れた10



常磐井忠伽先生

「肱川とむら」

コウシンシバを境木に
使った記録有

土居泰正先生私信

「周辺地域では**青面金剛**の像にマサキを
供える風習がある。青面金剛は水害を防
ぐ神様としても知られている。」

八坂書房「日本植物方言集成」

高知県幡多郡でもマサキを
コウシンシバと呼称

マサキは近現代にいきなり増えたわけではなく、
庚申信仰(青面金剛)に関わる植栽の可能性あり

入手しやすい野生のヤナギも歴史は長い可能性あり

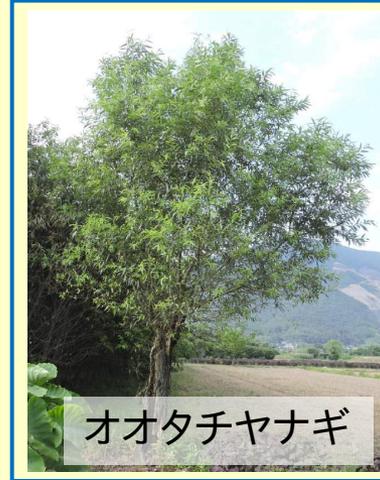
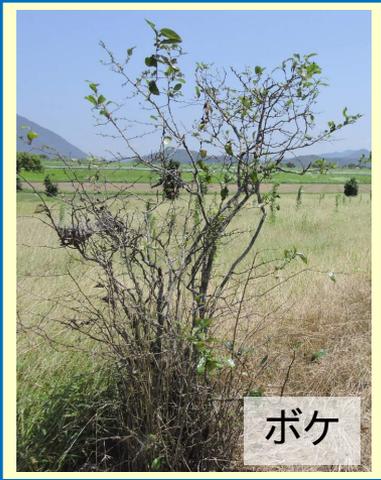


オオタチヤナギ



アカメヤナギ

大洲肱川沿いの境木の歴史的背景



昔はより多かった 近年増加も庚申信仰影響

野生樹の挿し木



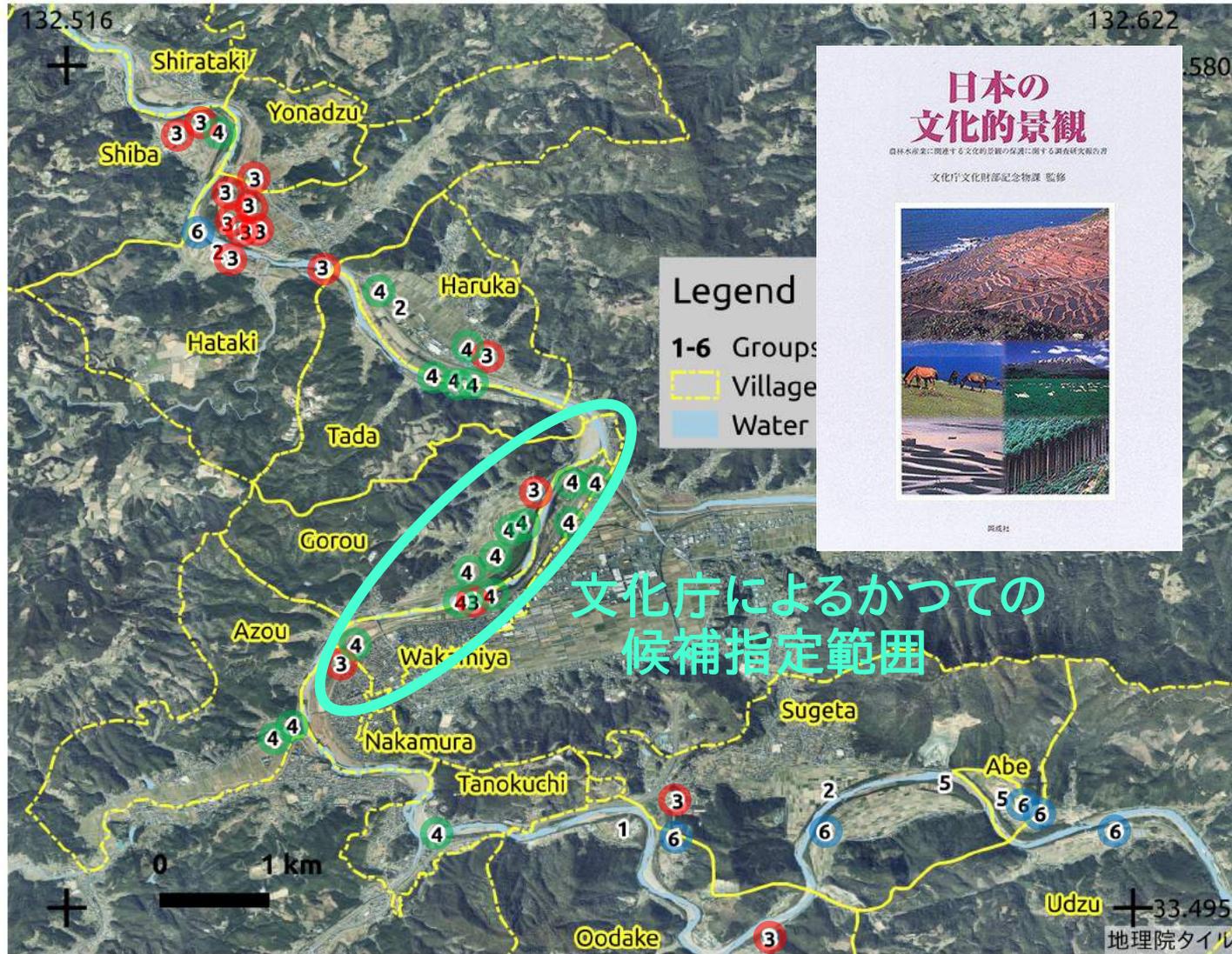
養蚕・行李産業の名残り



庭木・生垣樹種の併用

民間信仰、野生・生垣・庭木樹種、工芸作物の利用など異なる背景のもと多様な樹種が入替わりながら今に至る

多様性に富む境木景観を未来に伝えるために



Tokuoka et al. (2019)
J Ethnobiol Ethnomed
 15:21を一部改変

上・中・下流全域の境木景観とその民俗の保全が望まれる